



# わたしの聖戦

女性が働くことについて

191

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## あいまいな記憶

近頃、「記憶」にまつわる話題が多いように思う。

難解な脳科学の範疇であるが、高齢社会にあつては、誰にとつても身近であり、かつ自身の問題として気になるテーマには違いない。

実は、記憶に関してはわからないことだらけ、である。よく耳にする「海馬」。これが記憶に大きく関与するのは確かだ。新しい記憶は海馬に保存され、その中で大切なことや印象深いものは、大脳皮質に蓄積されていく。ところが、手続き記憶と呼ばれる自転車の乗り方やみそ汁の作り方は、小脳が関係している。体

で覚えた記憶は小脳などを中心としたネットワークによって維持されているらしい。

加齢とともに記憶力が劣化していくことを嘆いている人は多いと思うが、加齢と記憶力の関係を否定する研究も多い。人名前や固有名詞が出てこないのは年のせいという思い込みは、いったん捨てた方が良さそうなのだ。記憶が書き換えられるという話もよく聞く。こちらは、マウスや人を対象とした複数の実験で確認されている。よく、認知症の人が昔のことを誇大妄想的に話したり、自分の体験と人のそれとを混同して話をしたりする。

これは何も認知症特有の現象ではなく、誰もが経験することなのだ。若い時はよくモテた、成績はいつもトップだった、水泳では負けたことがない、などなどの自慢話は、それらが事実と異なっている、本人は嘘をついている自覚はない。



この種の発言は確かに高齢者に多く、遠い過去について「こうありたい」という長年の思いが、記憶を混乱させているのだ。だからこのようなきは、事実と違ってしていると知っ

ていても、頭ごなしに否定するのはなく、素直に頷いたり、相槌を打つことが良いのだという。記憶が書き換えられるのは、高齢者ばかりではなく、若い人にも起こりうる。逮捕歴のある堀江貴文氏は、取り調べの検事に誘導され、やってないことでも「やったかも」と思ってしまうと告白している。また、犯罪現場に居合わせた複数の人々が供述する犯人像は、驚くほどそれぞれ異なっていることがある。いったい、記憶って何？ となってもおかしくない。

その時父親はどんな服装をしていたのか、などなどとにかく「すべて」を記憶している。彼らの脳の中では何が起こっているのだろうか。症例数が少なすぎて、その解明には至っていないが、記憶のメカニズムを解明するために欠かせない人々として、研究者から注目されている。

（超記憶症候群）がそう。記憶が限局的なサブアン症候群とは違って、こちらはすべての事を細かく記憶でき、世界に20人しかいないとされている。例えば、はじめて犬が家にやってきた日はいつか、その日は何を食べてどんなテレビを見たのか、私達の脳は、いい加減にできているほうがいい。人は忘れる動物であり、だからこそ辛い日々を生きていくことができる。インプットする能力は大切だが、「忘れる」能力も、もつと評価されているように思う。